農業生産法人 (有)山波農場

山波　剛

YAMANAMI　TSUYOSHI

1971年 柏崎市出身
1992年 有限会社 山波農場　設立

霊峰米山と黒姫山に囲まれ、山々から湧き出る清流に育まれた豊かな大地。柏崎市の別俣地区で農業生産法人を営む山波農場は今年で30年を迎えた。

そもそも山波農場は現代表の父、山波家希さん（現取締役相談役）が1980（昭60）年にこの地域の農地を守るため、務めていた会社を辞めて専業農家になったことから始まった。当時、兼業農家の多かったこの地区も高齢化などによって農業の担い手が減っていた。「農地が荒れていくことを危惧した父が、その受け皿になることを決めた」という。

数年で依頼される水田の数が増え、母、祖父母も父を手伝うようになった。高校生になった剛さんは、父から「家を継ぐならこれからも規模拡大を進めていく。継がないなら自分に出来る規模に留めておく」と将来の決断を迫られた。剛さんは父の志を無駄にしたくないと思い、2年間専門学校でIT技術を学んで家業に入った。

20歳で家業に入った剛さんは、会社設立時に取締役になれという父の薦めを断り、地域の人たちと共に汗を流して、一から米作りのことを学んだ。当時、一緒に働いていた人たちは65歳を過ぎた人生の経験豊富な先輩ばかり。「一服の休憩のたびに地域のことや組織のこと、人生についてのさまざまなことを教わった。それは自分にとって生きていく上での指標であり、今も大きな財産」だという。

会社設立時に大切な理念や方針、規則などを作成、雇用や保険などの経理もすべて剛さんが担当した。しかし、本当の意味での理念や果たすべき使命、山波農場の将来像をイメージできるようになったのは30歳を過ぎた頃。「皆様と共に地域を守ります」という理念の下、冬季道路除雪や地域の貢献につながる活動、地域の人たちが安心して農業を続けられるための下支えにつながる体制作りをようやく整えたと話す。

法人として米を生産し、付加価値を付けた米の販売や切り餅の販売など「全国にはたくさんのお客様がいて山波農場はお客様に支えられている」と感謝する。水稲以外の0.5haの畑には枝豆やとうもろこしなどが植えられているが、これは「全てお客様への付加価値。さつま芋は子どもたちの芋ほり体験用」とほほ笑む。人を呼び込むための仕掛けづくりをしたいという山波 剛さん。この地域を未来に残すための模索が続いている。

お問い合わせ

農業生産法人
有限会社 山波農場
柏崎市水上467
0257-29-2442
0257-29-2130

ホームページもチェック！